

令和7年度 国際理解教育 プレゼンテーション コンテスト報告書

International Understanding Presentation Contest 2025

21st December, 2025
TOKI MESSE Niigata Convention Center
International Conference Hall <Marine Hall>



目 次

ごあいさつ 公益財団法人新潟県国際交流協会理事長	中山 輝也	2
国際理解教育プレゼンテーションコンテストに寄せて		
新潟県教育委員会教育長	太田 勇二	3
新潟県国際理解教育推進協議会会長	坪井 望	4

I. プレゼンテーションコンテスト

1 コンテストの概要	6
2 発 表 概 要	
・ 中学生部門	13
・ 高校生部門	21

II. 台湾スタディツアー

1 台湾スタディツアー 概要	31
2 研修日程について	33
3 スタディツアー 参加者レポート	36

III. 付録資料

令和7年度国際理解教育プレゼンテーションコンテスト実施要項	47
-------------------------------	----

ごあいさつ

公益財団法人新潟県国際交流協会 理事長
中山 輝也



県民の皆様におかれましては、日頃から公益財団法人新潟県国際交流協会の活動にご支援ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、本コンテストは、若者の国際感覚や国際認識を高め、世界に関心を持ち自ら積極的に考える機会を提供するため2006(平成18)年から毎年開催しており、今回で記念すべき20回目を迎えました。

今回は、中学生部門7団体、8チーム、高校生部門7団体、9チームが発表を行い、国際的な問題や国内の課題など、様々なテーマで発表いただきました。会場には186名もの方々にお出でいただき、出場した生徒たちの熱意あふれる姿勢と説得力のあるプレゼンテーションに多くの方々から称賛の声が寄せられたところです。

最優秀賞チームが参加した副賞の海外スタディツアーでは、今でも台湾の人々に尊敬される日本人である八田與一技師が手掛けた烏山頭ダムを見学し、その偉業を目の当たりにすることにより深い感銘を受けたことがスタディツアー参加者レポートから知ることができます。

さて、世界には、紛争をはじめ多くの国際問題があります。そうした中で、先人たちが築いてきた草の根の友好関係を引き継ぎ、地域間の国際交流をさらに発展させることは、国家間の課題解決にもつながると考えており、多様な価値観を尊重しながら主体的に考え行動できるグローバル人材の育成は重要であると考えています。また、多様な文化や価値観を持つ人々が互いに認め合い、支え合いながら暮らすことのできる多文化共生社会の形成を目指した取組を進めていく必要があると考えています。

柔軟な発想力と行動力を持った若い皆さんが、世界の諸問題について考え発信することは大変意義深いことです。このコンテストをきっかけに、異文化への敬意と日本人としての誇りを持った国際人として、多くの皆さんが新潟県から世界へ羽ばたいてくれることを期待しています。

終わりに、公平かつ公正な審査にご協力いただきました審査員の皆様をはじめ、本コンテストの開催にあたりご協力を賜りました多くの皆様に厚く御礼申し上げますとともに、今後とも新潟県における国際理解教育の一層の推進のため、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

国際理解教育プレゼンテーションコンテストに寄せて



新潟県教育委員会 教育長
太田 勇二

2025年における県内の外国人延べ宿泊者数が82万880人と過去最多を更新し、県内で暮らす外国人数も増加するなど、新潟県に暮らす私たちにとって、世界とのつながりはこれまで以上に身近なものとなっています。観光や産業、地域社会のさまざまな場面で、多様な文化的背景をもつ人々と関わる機会が広がり、国際理解教育の重要性は一層高まっています。

新潟県教育委員会では、令和8年3月に策定した「第2期新潟県教育振興基本計画」において、「グローバル社会に対応した教育の推進」を重要な柱の1つに位置付けており、我が国やふるさとの伝統文化の良さを深く理解するとともに、豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、国際理解の精神等を身に付け、様々な分野で活躍できる人材の育成を目指しています。

その実現に向け、生徒のコミュニケーション能力を育成する英語教育を推進するとともに、海外研修や外国人留学生と交流する機会を充実させ、異文化への理解を深めるなど、多様な人々と協働し創造的に生きていくために必要な資質・能力の育成を図る取組を進めています。

「国際理解教育プレゼンテーションコンテスト」は、生徒が自らの問題意識をもとに調査・研究を行い、国際理解に関わるテーマについて考えたことを論理的にまとめ、発信する貴重な機会です。多文化共生、環境問題、地域と世界のつながりなど、身近な課題を広い視野で捉え直す経験は、国際理解を深めるだけでなく、主体性や協働性、表現力を育むうえでも大きな意義があります。また、ほかの生徒の発表に触れ、異なる視点や考え方を学ぶことは、物事を多角的に捉える力を育て、課題をより深く理解することにもつながります。

本コンテストへの参加を通じて、新潟県の中学生・高校生が、多様な文化や価値観を尊重し、世界とつながる未来を切り拓いていくことを期待しています。

国際理解教育プレゼンテーションコンテストに寄せて

新潟県国際理解教育推進協議会 会長
(新潟大学 副学長)
坪井 望



近年のグローバル化の状況においては、国際サプライチェーンを含む経済成長構造の再構築、気候変動に関連した脱炭素化・環境保全・災害リスク等への国際的な共同対応、国内外に渡る人口動態・経済格差・多文化共生に対応したウェルビーイング社会の実現、デジタル技術の進展によるボーダレスな新しい価値の創造と同時に発生するリスクの抑制などの、様々な新たな複合的な世界共通課題への個別最適的な対応が、日常的な社会生活レベルにおいても求められています。これらの課題の間には、しばしば密接な連環関係があり、ある課題の解決対策が、他の課題の深刻化を引き起こす場合もあります。そのため、単一の学術的専門力や単独の国では解決困難な場合では、多様なステークホルダーとの連携を通じて、文理横断及び文理融合を含む総合的な知見を現実社会に実装できる実践力と共に、国際的な協働力や交渉力が重要となります。

このような社会や経済の不確実性の時代を生き抜くための人材の育成のニーズを背景とし、中央教育審議会での次期学習指導要領の検討においては、生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、自らの人生を舵取りすることができる、民主的で持続可能な社会の創り手を「みんな」で育むための基本的な考え方と、これを議論するための3つの方向性（①「主体的・対話的で深い学び」の実装 (Excellence)、②多様性の包摂 (Equity)、③実現可能性の確保 (Feasibility)）が提起されています。①②の一部を構成するものとして、学びに向かう力、人間性等の概念の再整理、総合的な学習・探究の時間を中心とした質の高い探究的な学びの実現、AIを含むデジタル化の負の側面への対応を含む情報活用能力の抜本的向上、特別活動を中心とした主体的な社会参画に関わる教育の改善等が議論されています。多様性を包摂して可能性を開花させる教育では、「正解主義」や「同調圧力」への偏りから脱却するとともに、民主的かつ公正な社会の基盤として学校を機能させ、分断や格差の拡大を防ぎ、共生社会を実現する観点が重要視されています。また、③に関連する「みんな」が示す主体においては、子供や教職員はもとより、保護者や地域住民、地方公共団体職員、民間の担い手も含まれており、個人と社会のウェルビーイングの実現が結びつけられています。

新潟県国際理解教育推進協議会と(公財)新潟県国際交流協会は、県内の中学生・高校生がグループで国際理解を深める機会として、国際理解教育プレゼンテーションコンテストを継続的に実施しています。国際理解に係る課題の発見・解決に係るグループワークは、国際理解教育に寄与することに留まらず、多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を創造する主体的な学習機会を提供する取り組みです。この取り組みを積極的に活用・体験した皆さんが、将来において持続可能な社会の創り手として活躍され、多文化共生の地域づくりを推進し、地域社会の発展と世界に開かれた新潟県の実現に貢献してくださることを願っています。

I. プレゼンテーションコンテスト

1. コンテストの概要

【日時・場所】

令和7年12月21日（日）12:00～17:00

朱鷺メッセ 国際会議室（マリンホール）

【プログラム】

12:00～12:50 開会式・コンテスト（中学生部門 前半）

13:00～13:40 コンテスト（中学生部門 後半）

13:50～14:30 コンテスト（高校生部門 前半）

14:40～15:30 コンテスト（高校生部門 後半）

15:35～16:05 アトラクション

16:20～17:00 審査発表・表彰式

【審査員】

＜中学生部門＞※敬称略・順不同

新潟県国際理解教育推進協議会会長／新潟大学副学長

坪井 望（審査員長）

新潟県教育庁 高等学校教育課 副参事（指導第2係長）

一本鎗 裕

新潟市観光・国際交流部 部長

関川 丈彦

公益財団法人 AFS 日本協会 新潟支部 支部員

山際 由記子

株式会社新潟日報社 報道部 部長代理

石田 篤志

＜高校生部門＞※敬称略・順不同

上越教育大学 学校教員養成・研修高度化センター 特任教授

鈴木 克典（審査員長）

新潟県教育庁 義務教育課 指導第2係 指導主事

長谷川 宏之

公益財団法人新潟市国際交流協会 業務執行理事 事務局長

池田 比呂哉

独立行政法人国際協力機構（JICA）東京センター 所長

紺屋 健一

株式会社新潟放送 経営管理局 CSR 推進部長

高橋 紀子



【司会】

中津川 英子（アナウンサー）

【アトラクション】

多文化共生×笑い

森下 英也（新潟お笑い集団 NAMARA）

【出場チーム】

	チーム名	タイトル
中学生部門		
1	ハンサムいわし（新潟市立下山中学校）	避難所×国際理解 ～違いを超えて共に生きる～
2	Seek stars.（個人）	国橋をわたる ―Bridging People Around the World―
3	シーラカンス（新潟明訓中学校）	Know more about each other
4	白南革命（新潟市立白南中学校）	学ぶことは生きること ―夜間中学校を通して考える未来のカタチ―
5	Step Forward （新潟県立直江津中等教育学校）	ノートが足りない世界に希望は足りる？
6	Beyond Borders （(公財)長岡市国際交流協会）	ちがいておもしろい！異文化から学ぶ
7	ゼロロス4（新潟明訓中学校）	SDGs 食品ロス貧困
8	NOVA（個人）	世界をさあアップデートしよ！
高校生部門		
1	Glocal 部（新潟県立燕中等教育学校）	あったかいごはん、あったかい居場所
2	Eco Chic（新潟明訓高等学校）	廃棄米×ファストファッションから考えるプラスチック
3	北越高校 English Club（北越高等学校）	「空気を読む」これって、日本だけ？
4	ちゃでんしす（新潟明訓高等学校）	#Free
5	Beyond（新潟県立直江津中等教育学校）	超える
6	チャクラ（上越高等学校）	Being me leads to living in harmony with different cultures.
7	目黒商事 三条支店 （新潟県立三条商業高等学校）	プロジェクトFT 2025 ～FT 商品で世界と地域をつなげ！～
8	ディスカス（新潟県立三条高等学校）	世界を広げる読書 ―Discussion Reading―
9	水なすマカロン（上越高等学校）	一杯のバケツに2時間、命の距離8キロメートル

【中学生部門】

○最優秀賞

白南革命（新潟市立白南中学校）

「学ぶことは生きること 一夜間中学校を通して考える未来のカタチー」

○優秀賞

ハンサムいわし（新潟市立下山中学校）「避難所×国際理解 ～違いを超えて共に生きる～」

Beyond Borders（（公財）長岡市国際交流協会）「ちがいておもしろい！異文化から学ぶ」

○優良賞

シーラカンス（新潟明訓中学校）「Know more about each other」

NOVA（個人）「世界をさあアップデートしよ！」

○審査員奨励賞

ゼロロス4（新潟明訓中学校）「SDGs 食品ロス貧困」

【高校生部門】

○最優秀賞

Eco Chic（新潟明訓高等学校）「廃棄米×ファストファッションから考えるプラスチック」

○優秀賞

ディスカス（新潟県立三条高等学校）「世界を広げる読書 ―Discussion Reading―」

目黒商事 三条支店（新潟県立三条商業高等学校）

「プロジェクト FT2025 ～FT 商品で世界と地域をつなげ！～」

○優良賞

Glocal 部（新潟県立燕中等教育学校）「あったかいごはん、あったかい居場所」

北越高校 English Club（北越高等学校）「『空気を読む』これって、日本だけ？」

○審査員奨励賞

水なすマカロン（上越高等学校）「一杯のバケツに2時間、命の距離8キロメートル」

【参加者名簿】

中学生部門 ※学年は令和7年12月21日現在

チーム名	学校名・組織名	学年	メンバー	指導者
ハンサムいわし	新潟市立下山中学校	2	加藤 愛唯	教諭 水堀 雄斗
		2	佐藤 樹仁	
		2	谷口 愛実	
		2	山西 悠翔	
Seek stars.	個人参加	3	石井 咲妃	会社員 羽賀 亮介
		3	羽賀 理沙	
		2	池田 葉和	
		1	羽賀 美夏	
シーラカンス	新潟明訓中学校	3	岡田 那優	教諭 梅田 愛子
		3	桐生 飛和	
		3	佐藤 康平	
		3	高橋 國雅	
		3	朴 理亨	
白南革命	新潟市立白南中学校	3	大野 友結	教諭 山崎 寛己
		3	落合 一花	
		3	真保 權	
		3	高橋 清士朗	
Step Forward	新潟県立直江津中等教育学校	3	大橋 茉白	教諭 石黒 優子
		3	小川 和葉	
		3	鹿住 丹瑚	

チーム名	学校名・組織名	学年	メンバー	指導者
Beyond Borders	(公財)長岡市国際交流協会	2	王 佳熙	事務局員 陣内 千香子
		2	佐藤 美愛	
		2	田村 ひな	
		2	吉澤 葵	
ゼロロス4	新潟明訓中学校	1	田中 こころ	教諭 梅田 愛子
		1	田中 花那乃	
		1	柳澤 咲良	
NOVA	個人参加	3	河井 優季	長岡市地域おこし協力隊 佐藤 美優
		3	丹羽 詩音	
		3	疋田 陸杜	
		3	丸山 のい	

高校生部門 ※学年は令和7年12月21日現在

チーム名	学校名・組織名	学年	メンバー	指導者
Glocal部	新潟県立燕中等教育学校	2	伊藤 遼亮	教諭 乙川 明子
		2	近藤 陽菜乃	
		2	清水 縁	
		2	田中 結愛	
		2	富田 紗帆	
Eco Chic	新潟明訓高等学校	2	川上 ゆう香	教諭 牧井 智生
		2	酒井 多実	
		2	田村 優奈	
		2	堀口 未央那	
北越高校 English Club	北越高等学校	2	田辺 咲和	教諭 関 洋介 常勤講師 佐藤 綾花
		2	手島 沙会	
		2	橋本 結	
		1	大島 蒼佑	
		1	渡邊 莉亜奈	
ちゃでんしす	新潟明訓高等学校	2	井上 迪姫	教諭 梅田 愛子
		2	小林 佳菜	
		2	斉藤 ななみ	
Beyond	新潟県立直江津中等教育学校	1	長井 綺星	教諭 伊藤 あかね
		1	山本 美々香	
		1	両川 柑南	

チーム名	学校名・組織名	学年	メンバー	指導者
チャクラ	上越高等学校	2	五十嵐 生威	教諭 大沼 仁
		2	ガーン	
		2	千万 ハ了	
		2	長島 咲希	
目黒商事 三条支店	新潟県立三条商業高等学校	3	青木 心奏	教諭 目黒 正栄 教諭 市川 操
		3	芦田 沙也	
		3	小栗 りるは	
		3	佐藤 楓花	
		3	山本 庵慈	
ディスカス	新潟県立三条高校	2	大橋 唯斗	教諭 関澤 佳織 教諭 押木 和子
		2	川沼 真子	
		2	若穂岡 奏音	
水なすマカロン	上越高等学校	1	釜田 希望	教諭 関沢 秀栄
		1	濁川 ひより	
		1	渡部 紗子	

2. 発表概要

【中学生部門】最優秀賞

白南革命（新潟市立白南中学校）

「学ぶことは生きること 一夜間中学校を通して考える未来のカタチー」

「学ぶってなんだろう」「人は何のために学ぶのだろう」

この2つが私たちの問いでした。はじまりは、60歳を過ぎるまで鉛筆を握ったことのなかった吉田一子さんとの出会いです。彼女が大阪の識字学級で学んだ日々をつづった『ひらがな日記』を読み、私たちは「学ぶこと」に関する探究的な学習をはじめました。識字学級と同じように、その後全国で夜間中学が展開されてきました。夜間中学とは元々、戦後の混乱期に学習できなかった人のための学びの場です。しかし、時代とともにその役割は変化しています。私たちは3つの点から行動してきました。



1つ目は夜間中学の現状を知ることです。新潟市教育委員会の夜間中学開設準備室を訪れ、田中良成室長から全国の現状を教えてもらいました。新潟県では、義務教育未修了者が多い割に公立夜間中学が設置されていないこと、そして、近年は全国的に入学対象者として外国籍の方が全体の半数以上であることなどを知りました。さらに理解を深めるため、自主的に夜間中学校を開いている新発田自主夜間中の代表・松本英也さんに連絡を取り、学習会を開きました。満州引き上げの90歳を超える方、東南アジアからの技能実習生、不登校経験のある方など生徒の皆さんが、様々な事情がある中、明日の生活を彩りあるものにする「尊い」姿勢や思いをもって学びに来られていることを知りました。

2つ目は世界の中学生との交流です。JICA海外協力隊に依頼し、キルギスの同級生たちと「学ぶこと」についてオンラインで意見交換を行いました。ある男の子に将来の夢を尋ねた時、彼は「お金をかせぐために日本で働きたい」と答えました。将来彼らが日本に来た時、果たして学べる場所は十分なのか、この交流からそんな場所を作りたいと思うようになりました。

3つ目は日本語支援の現場に入ってみる事です。地元・南区の日本語教室 KOCOBO を訪れ、日本で働きながら日本語を学んでいる学習者さんたちと出会いました。初めは見学だけでしたが、何度も通ううちに活動を任せてもらえるようになりました。『ひらがなにつき』の読み聞かせをしたり、書道で皆さんの夢を書いてもらったりしました。そんな中、ニュースで新潟市に公立夜間中学の開設が決まったことを知りました。私たちは、KOCOBO の皆さんと夜間中学を知ってもらう冊子を一緒に作り、街ゆく人に手渡す活動を行いました。夜間中学を知らない人が冊子を手にしながら、興味をもってくださる様子がとてもうれしかったです。



私たちの描く理想の未来のカタチは、様々な人や立場、組織が点ではなく面となって社会全体が学ぶことを支援する1つの大きな学びの場となることです。学ぶことは生きることそのものであり、決して誰にも奪えないことです。ぜひ皆さんにも夜間中学に興味をもってもらい、知らないふりをやめる仲間になっていただきたいです。

【中学生部門】優秀賞

ハンサムいわし（新潟市立下山中学校）

「避難所×国際理解 ～違いを超えて共に生きる～」

私たちは、国際理解の視点で行われた防災ワークショップに参加しました。そこで「もし外国人が避難してきたら」という状況を想定し、避難所運営ゲームを行いました。その中で、避難所には言葉や文化の違いから不安や誤解が生まれる可能性があることや私たちの想定していない「外国の方の困りごと」があることを学びました。また、1995年に発生した阪神淡路大震災での死者数は6,430人であり、外国の方の死亡率・負傷者を割合で比較すると、日本人の約2倍だったということも知りました。本来、避難所は誰にとっても安心できる場所であるべきなのに、必ずしもそうではない現実に気づきました。だからこそ、違いを超えて共に生きるために避難所について考えることが大切だと考え、活動を始めました。



まずは実態を知るために地域の防災訓練に参加しました。避難者の視点で訓練に参加することによって、外国の方には分かりづらい避難所のルールを書いた紙や表示があることに気づきました。また、避難所での翻訳機を使った対応にも疑問を抱きました。

防災ワークショップで感じた文化の違いや防災訓練で感じた言語の壁があることを知った私たちは、海外の事情を知るために、海外の被災地を支援する活動をしている中村雄一さんにお話を伺うことにしました。中村さんの話から、防災の概念がなかったために感染症にかかったり食料が足りなくなったりしてしまい、命を落としてしまう人がいるということを知りました。「知らないこと」「伝わらないこと」で命の危険が増えてしまうのは日本の被災地でも海外の被災地でも同じことなのです。

知らないことをなくし、伝わらないことを解消するために、私たちは伝わりやすく、親しみやすい防災パネル「ハンサムパネル」を作成しました。パネルを使って必要な情報を伝えるとともに、パネルの持ち手の「助けたい」という想いを伝え、外国の方に安心してもらうことが目的です。作ったパネルは新潟市に住む留学生の方々に見てもらい、より分かりやすいパネルへと改良しました。



作成したパネルは地域の防災士さんに地域で使ってもらい、さらに中村さんに世界の国々に届けてもらいます。震災の多い国で育った私たちの知識をパネルという形で世界に届け、たくさんの方々の命を守ることに繋がりたいと考えています。

私たち一人一人が知らせる人、伝える人になり、「お互いの違いを超えて共生できる」そんな未来をつくっていきます。

【中学生部門】優秀賞

Beyond Borders ((公財)長岡市国際交流協会) 「ちがいておもしろい！異文化から学ぶ」

私たちは学校で平和について学習する中で、「平和とは何か」「他国や他文化の人と理解し合うことはなぜ大切なのか」という疑問を持ちました。メンバーの一人は、京都旅行で多くの外国人観光客を見かけ、マナーの悪い人もいれば、そうでない人も多いことに気づきました。「外国人はルールを守らない」といった見方は偏見につながり、誤解や偏見があると平和的理解には結びつかないと考えるようになりました。

そこで私たちは、平和的理解についての考えを深めるため、InstagramやLINEを使って小学生から60代以上までの幅広い年代230人以上にアンケートを実施しました。その結果、95%以上の方が平和的理解は大切だと回答し、理由として「文化の違い」「認め合う」「理解し合う」といった言葉が多く見られました。一方で、理由が「わからない」と答えた人も一定数おり、理解の深さには差があることも分かりました。

グループには長岡市からアメリカに派遣された経験をもつメンバーがおり、その体験をもとにプレゼンテーション当日には、寸劇を行いました。日本の学校では男女間に距離があり、積極的に話しかけない様子が見られる一方、アメリカの学校では初対面でも気遣いを示し、気軽に遊びに誘う文化があることを紹介しました。ただし、国を単純に二分するのではなく、違いも共通点もあり、私たちが知らないだけで多くの誤解や偏見が存在することに気づくことが大切だと考えました。視野を広げることで、どちらの国にも強みや魅力があると分かりました。

さらに、中国出身のメンバーも自身の経験を寸劇で伝えました。中国にいた頃は、日本人は怖くて冷たいというマイナスのイメージがある一方、優雅で几帳面という印象もあり、日本についての情報が多く不安を感じていました。しかし実際に日本で暮らすと、中国と共通点が多く、積極的に話しかけてくれたり、丁寧に教えてくれたりする優しさに触れたりし、違いを知ることが面白いと感じるようになりました。

私たちは、誰もが他国に対して誤解や偏見をもちやすいと考えています。外国と日本の人の間には見えない「境界線」がありますが、それは分ける壁ではなく、異文化の世界をのぞく入口にもなり得ます。その入口を開くためには、まず「知ろうとする姿勢」が大切です。文化や背景を少し知るだけで誤解や偏見は大きく減ります。境界線の前で立ち止まらず、一歩踏み出して相手の世界をのぞき、互いの文化を尊重していくことが、平和的理解につながると私たちは考えました。ここが悪い、ここが良いではなく、「違いっておもしろい」と感じることは大切です。このような思いから、私たちはその大切さを表すために、「Beyond Borders」というチーム名をつけました。「違いっておもしろい」と感じるには、身近な国際的なイベントに参加するのが最も近道だと

思いました。例えば、長岡市には国際交流協会が主催しているイベントがあります。実際に私たち4人もこれらのイベントに参加して、誤解や偏見を減らすことができました。また、他国の人との交流を通して、私たちは、異文化についての理解を深められました。身近な国際交流の場に一歩踏み出すことは、平和への第一歩になると考えています。みなさんも身近なところから「異文化の世界の入口」に立ってみませんか。



【中学生部門】優良賞

シーラカンス（新潟明訓中学校）

「Know more about each other」

皆さんは、偏見で物事を決めたり決められたりしたことはありませんか。偏見は間違った印象を与えることがあります。実は国籍についても似たようなことが起こっています。これを「外国人差別」と言います。

私たちがこの差別に興味を持ったきっかけは二つあります。一つは、私たちの学校で外国人差別があったことです。私たちは身近に差別があることを知りとてもショックでした。二つ目は、学校行事で海外の留学生と交流する機会があったことです。私たちは、海外の留学生と交流することで、私たちが海外の方に対して偏見を持っていることに気がつきました。これらのことをきっかけに、私たちは、「外国人差別をなくしたい」と思ったのです。

そこで、私たちは、なぜ外国人差別が起こるのかを考えました。私たちは留学生を「知る」ことで偏見をなくすことができました。つまり差別も「知る」ことができればなくせる。だから差別の原因は「知らない」こと「無知」であることだと考えたわけです。

「差別の原因は無知」ということを確かめるために、海外の方と交流する機会があった人に、海外の方と交流する前と、交流した後での海外の方へのイメージについてアンケートしました。アンケートの結果、交流した後は、「いいイメージ」と答えた人が圧倒的に多かったです。

このことから、外国人差別は無知から起こるということがわかりました。外国人差別をなくすためには、「知る」ことが必要です。私たちにできることは、思ったことをすぐに口に出さず、まず知ろうとすることです。しかし、相手を知ったことで、相手の嫌なところが見つかる可能性があります。そのような時は、嫌なところを心にしまってください。

次に、差別が起こったときに私たちにできることを探るために、学校のALTの先生と、インドネシア出身のデジさんに、もし差別を受けたら何をして欲しいかを聞きました。話を聞くと、差別をした人にも、された人にも声かけをして欲しいとおっしゃっていました。また、私たちのチームに韓国にルーツのあるパクからも話をします。パクも、一言でもいいからした人にも、された人にも声かけをして欲しいと言っていました。

私たちは「外国人差別」について書いてきました。私たちが伝えたいことは三つです。一つ目は、知ろうとすること。二つ目は、相手の嫌なところは心にしまっておくこと。三つ目は、声かけをすること。差別をなくしていきましょう！



【中学生部門】優良賞

NOVA（個人）

「世界をさあアップデートしよ！」

「多様性」とは何でしょうか。SNSで行った長岡市民中心を対象としたアンケートでは、他者理解やジェンダーに関する回答が多く見られました。しかし私たちは、多様性とは単なる言葉の定義ではなく、「更新し続ける意識」そのものではないかと考えました。

昨年の夏、私たちは長岡市の姉妹都市であるフォートワース市を訪問しました。そこでは、さまざまな背景をもつ人々が互いを尊重しながら自然に共に生きている姿がありました。その経験を通して、私たちは自分たちの身の回りを見つめ直しました。長岡市には2025年11月時点で3,129人の外国籍の方が暮らしています。私たちはその方々を「外国人」という一つの言葉で、ひとまとめにしてしまっていないでしょうか。

乗り越えるべきものは、無意識のうちに相手を型にはめてしまう「決めつけ」です。前述のアンケートでは、大人の約9割が「自分にも決めつけた経験がある」と答えました。物事を認識することと、根拠なく結論づけてしまうことは違います。私たちは、「壁を作っているのは相手ではなく、自分の心なのではないか」と気づきました。

この心の壁は、学校生活の中にもあります。ある企画会議で、おとなしい生徒に対して「意見がないだろう」「怖がりだろう」と周囲が決めつけ、内容を先に決めてしまったことがありました。しかしその生徒は、本当は小道具作りで貢献したいという強い思いを持っていたのです。決めつけは、その人の可能性や才能を見えなくしてしまいます。

そこで私たちは、古い考えを新しい理解へと更新する「アップデート」を提案します。

アッ：あっと立ち止まり、自分の考えを問い直す。

プ：プラスに捉え、違いを認め合う。

デ：出会った個性を、ラベルなしで受け止める。

ー：線引きをしない。

ト：共に歩み、協力を生み出す。



もし会議の場で「アッ」と立ち止まり、「別の役割があるかもしれない」と考えることができたなら、その生徒の力はきっと発揮されていたはずです。ほんの数秒の心の余裕が、新しい価値を生み出します。

私たちは、自分たちのいる場所から古い決めつけを手放し、理解を更新し続けることで、より豊かな共生社会を築いていきたいと考えています。

【中学生部門】審査員奨励賞

ゼロロス4（新潟明訓中学校）

「SDG s 食品ロス貧困」

小学生の頃、世界や日本の貧困を授業で学習しているにもかかわらず、毎日の給食では残飯を見かけない日はありませんでした。まだ食べられるのに捨てられてしまう、フードロスを目の当たりにしながら、「必要な場所に必要な食べ物が行き渡らないもどかしさ」を、中学に入学してから忘れずにはありませんでした。そんなとき思い出したのが、フードバンクの活動があると学んだことでした。



フードバンクとは、まだ食べられる余剰食品を寄付し、生活に困っている人たちに届ける活動です。新潟では2012年に活動が始まり、2013年にフードバンク新潟が発足しました。私たちの学校でも、1年生が学校田で育てたお米をフードバンクに寄付する取り組みが行われています。

そこで私たちは、フードバンクについての認知度を調べるためにアンケートを行いました。その結果、普段から食品を残さないようにしている人は93人いましたが、フードバンクについて「よく知っている」と答えた人は15人しかいませんでした。このことから、関心はあっても、活動について十分に知られていない現状があると分かりました。

フードバンクは、多くの人の協力によって想像以上に大きな成果を生み出すことができる活動です。私たちが新潟市内のコンビニを調査したところ、21店舗中5店舗に回収ボックスが設置されていました。多くはゴミ箱の近くに置かれており、「捨てる」前に「生かす」ことに気づきやすい工夫がされていました。

先日、私たちはフードバンク新潟を訪問し、寄付された食品を運ぶ作業を手伝わせていただきました。学校などから多くの食品が届けられており、年間で約104トンもの食品がやり取りされていることを知りました。

インタビューでは、副理事長の眞木さんから「フードバンクは、家庭の自立を支える場所であり、特に体験することが大切だ」というお話を伺いました。失敗を恐れず挑戦し続けることの重要性を学び、私たちはその第一歩として、今回の活動を学校に提案し、明訓中学校の公式Instagramに投稿しました。中学生でもこのような活動ができることを、多くの人に知ってもらいたいと考えたからです。



これまでの活動を通して、フードバンクは地域全体がチームとなり、支え合う仕組みであることが分かりました。また、フードバンク新潟では、相談窓口としての役割も果たしています。

私たちの小さな行動は、世界で起きている問題と確かにつながっています。世界の課題は遠い場所の話ではなく、私たちの足元から動き出しています。地域の一步が世界を変えると信じ、私たちもこれから新たな道を切り開いていきます。

Seek stars. (個人)

「国橋をわたる -Bridging People Around the World-」

私たちがこの発表を通して一番伝えたいのは、「言葉がなくても、想いは必ず通じる」ということです。きっかけは、クラスで孤立した外国人転入生の存在でした。そこから、私たちは「国籍が違って仲良くなるために、自分たちにできることは何か」を考えるようになりました。私たちが立てた“言語の壁”が原因である、という仮説を検証すべく、街頭アンケートを行い、411 人の方にご協力をいただきました。結果、わずかですが、言語が通じないことで話しかけない人が増え、言語の壁が交流を妨げていると実感しました。また「外国人のいるイベントに行ったことがありますか？」という質問では、多くの回答者が「ない」と回答しました。そこで、私たちはまず自分たちが動こうと考え、積極的にワールドリーダーズセミナーなどの異文化イベントに参加しました。それを通して、たとえ言語が違って、表情や仕草、笑顔といった非言語的な要素で、思いは驚くほど伝わるということを学びました。そこで、私たちは「非言語コミュニケーション」をテーマにしたイベントを企画、開催することにしました。準備段階では、外国人との交流経験がある方々にインタビューを行い、「相手の目を見る」「立場に立って考える」など、実践的なアドバイスをいただきました。そして本番のイベントを開催し、保育園児から大人までの方に参加していただきました。はじめは緊張していましたが、次第に笑顔が増えていきました。年齢や環境が違って、言葉以外で関わることで、相手を理解する姿勢が生まれたと感じています。また、インタビューで教えていただいたポイントを共有して活動をした結果、「相手の表情を意識するようになった」「言葉がなくても笑顔で通じ合えることを知った」といった感想が寄せられました。私たちはこれらの活動を通して、「言葉



～Bridging people around the world～



がなくても、想いは必ず伝わる」ということを感じました。コミュニケーションの根本にあるのは言語ではなく、「伝えようとする姿勢」です。橋が目の前にあっても、渡らなければ向こう側には着きません。だから、まずはあなたが一步を踏み出してみませんか。その一步が、誰かと誰かを結ぶ橋となります。私たちはその一步が必ず世界を変える、そう信じています。

Step Forward（新潟県立直江津中等教育学校）

「ノートが足りない世界に希望は足りる？」

「教育を受けることはとても大切なことである」私たちは、このことを日々の授業や学校で取り組む様々な体験学習を通して実感しています。しかし、ユニセフの調査によると、2億4400万人の子どもたちが学校に通えず、十分な教育を受けられていないそうです。その主な理由に、国政不安により教育環境が整えられていないこと、貧困、そして女性を教育から遠ざける、ジェンダーによる教育差別が挙げられます。



私たちは、教育に課題がある国でカンボジアについて調べました。1970年代に起きたカンボジアの国内紛争後、ポルポトの独裁により教育基盤が崩壊しました。その後、たくさんの団体の支援により、現在のカンボジアの就学率は上昇し、初等教育においては一定の成果を生み、状況も安定してきました。私たちは、自分たちも学生であるということで、学生が中心のボランティア団体であるIVUSAに注目しました。IVUSAの強みは学生の柔軟な発想と行動力を以って、周りを動かすことができることです。IVUSAの取り組みの1つに、学校建設があり、建設後もその地域に継続的な支援を行っています。しかし、課題もあります。それは活動が広く知られていないということです。

そこで私たちは、私たちに、今、できることを考えました。それは、この活動を、より多くの人に知ってもらうこと、興味を持ってもらうこと、そして参加してもらうことです。具体的には次のように実践します。

まず、校内放送で調べたことを発表し、IVUSAを紹介します。同時に説明会も開きより詳しく知ってもらう機会を増やします。さらに、ポスターも活用します。ポスターは、興味を持ってもらうために目につきやすいところに掲示する、見出しを“問い”にする、QRコードを付けて情報にアクセスしやすくするなどの工夫を施します。そして文化祭も認知度を上げる良い機会と考えます。文化祭では、活動内容を紹介するパンフレットを配布し、説明会を開催します。説明会の内容も、クイズ形式や体験的な学び



を取り入れて、「楽しく学べる」が興味を持つきっかけとなり、活動への参加につながると考えます。私たちの一歩は小さいものかもしれませんが、その一歩が他の誰かの一歩につながり、行動につながります。そしてそれらの一歩が結集した時、誰かの未来を変える大きな力になると信じています。

ノートが足りなくても、希望は足りる。それは、私たちが届けるから。

【高校生部門】最優秀賞

Eco Chic（新潟明訓高等学校）

「廃棄米×ファストファッションから考えるプラスチック」

世界の問題、日本の問題、新潟の問題。どれほど大きな世界の課題であっても、入り口は私たちの「日常の中」にあると考えました。

はじめに、私たちが毎日食べている「お米」に注目しました。調査を進める中で、新潟では廃棄米が、年間約 3,000 トンも発生しているという現実を知りました。

次に、私たちが身につけている「服」、特に大量生産・大量消費を前提としたファストファッションに注目しました。世界のプラスチック排出量の約 11%は衣類関連であり、この割合は決して小さくありません。

新潟で捨てられる米と、世界で捨てられる服。この二つの問題に共通しているのは、「まだ活かせるはずの価値が見過ごされている」という点です。この共通点に着目し、新しい解決策を考えました。

まず、企業の取り組みを知るため、海外の企業へ英語でメールを送り、取材を行いました。その結果、プラスチック依存に強い危機感を持ち、使い捨て包装を 95%削減している取り組みを知ることができました。

次に、廃棄米を原料とした「ライスレジン」に注目しました。私たちはバイオマスレジンを専門とする企業を訪問し、課題について打ち合わせを行い、ライスレジン製のボタンとショッパーをご提供いただきました。また、東北大学大学院の吉岡先生に Zoom で取材を行い、ライスレジンと海外由来のバイオマスプラスチックとの性能や環境負荷の違いについて教えていただきました。

そこで私たちは、「すべてを置き換えるのではなく、最も活かせる場所を見極めることが重要である」という結論に至りました。

その提案が、制服のカーディガンのボタンをライスレジンに置き換えることです。制服は毎年必ず一定数が生産され、安定した流通があるため、継続的かつ大きな削減効果が期待できると考えました。

さらに、校長先生へ提案を行い、県内 5 校でのポスター掲示を行いました。また、Lattice Cocolo 新潟店様では、実際にライスレジン製のショッパーを使用していただき、「初めて知った」「石油製より柔

らかくて使いやすい」という生の声を聞くことができました。

環境に配慮する一人ひとりの小さな選択が、新潟の廃棄米を活かし、世界のプラスチックごみ削減につながります。廃棄米は、日本の課題であると同時に、国際問題を解決する可能性を秘めた資源です。今日から、新潟の資源を使った地球にやさしい素材を選んでみませんか。



【高校生部門】優秀賞

ディスカス（新潟県立三条高等学校）

「世界を広げる読書 ―Discussion Reading―」

みなさんは読書にはどのようなイメージを持っていますか。1人で静かに読んでいると眠たくなったり、堅苦しいと感じたりするように、私たちは読書にマイナスなイメージを持っています。そこで、私たちが提案するのがディスカッションリーディングです。

ディスカッションリーディングと聞いてもみなさん聞き馴染みがないかもしれません。ディスカッションリーディングとは今までの静かなイメージの読書ではなく、話し合う読書です。ディスカッションリーディングでは、5～8人のグループを作り、指定された一冊の本をとりあえず読みます。そしてグループで、本のテーマや、登場人物の感情、作者の意図について話し合い理解を深めるというものです。

このテーマに気づいた理由は、読書教育や読書意識が海外と違うことに気づいたからです。私は3月にアメリカのボストンでの海外研修に参加し、図書館で読書をしている人の多さに驚きました。それをきっかけに読書について調べてみたらディスカッションリーディングを見つけました。

一方、日本では特に若者の読書離れが進んでいます。PISAの国際学力調査の結果では、読解力の順位は不安定で、学習指導要領にはディスカッションなどの話し合いを通して読書をするという明記がないことがわかります。対照的に、アメリカの教育基準を見てみると、ディスカッションという文字が多くみられます。

そこで私達は、先日行われた国際会議でアンケートを実施しました。27カ国42人の留学生に協力してもらい、8割以上の留学生がディスカッションリーディングを経験したことがあると回答しました。ですが、どうして日本にはディスカッションリーディングが普及しないのでしょうか。

それは私たち日本人がシャイだからです。私たちは授業での話し合いの場面などで意見を持っていないながらも、自分が発言することが邪魔であったり、目立ったりするものだと考えてしまいます。



そこで留学生に、ディスカッションリーディングを日本人でもできるように改善するポイントを聞きました。それを踏まえて私たちは新しいディスカッションリーディングを提案し、この方法でディスカッションリーディングを実際に行ってみました。

海外の人とディスカッションリーディングをすることで、ディスカッションリーディングは私たちと世界を繋ぐ手段となります。私たちがディスカッションリーディングを広げていきたいです。



【高校生部門】優秀賞

目黒商事 三条支店（新潟県立三条商業高等学校）

「プロジェクト FT ～FT 商品で世界と地域をつなげ！～」

現在、世界で約1億6,000万人以上の子ども達が児童労働に携わっていると言われています。そんな子ども達を助けたいと、私達が校内や地域にフェアトレード商品を広げる活動を始めて3年目になりました。私達の活動成果が少しずつ見えてきましたが、依然と日本でのフェアトレード購入率は低いままです。地域でもフェアトレード商品を目にすることはほとんどありません。

そこで、今年度は活動を一步前進させるためにフェアトレード製品を使ったオリジナル商品の開発に挑戦しました。試行錯誤の末に、商品を完成させ、販売までたどり着いたのが「ごんぼっぱアイス」です。“Think globally, act locally!”（世界規模で考えて地域で行動する）をコンセプトとしました。世界で取引されているフェアトレードの砂糖と、三条市下田地区の笹団子に使用されている特産品のごんぼっぱ（オヤマボクチという野草）を使ったアイスを開発しました。それを地元で販売することで、グローバルな活動を行うことができました。5月に初めてごんぼっぱアイスが販売され、お客様からもよい評判をいただきました。幸先のよいスタートに思いましたが、その後も苦労の日々が続きました。

7月の三条Lululu マルシェは、猛暑のためにイベントが途中で中止になりました。8月の佐渡アースセレブレーションのハーバーマーケットにも、佐渡総合高校と共同出店することにしました。しかし、佐渡へは船で行くためにアイスは持って行くことができません。夏、チョコレート商品も溶けて販売できません。販売できるフェアトレード商品を揃えることができずに、大変苦労したこともありました。しかし、三条商業高校での3年間、フェアトレード商品を広げるために行った様々な活動は、私達にとっては宝物です。

令和7年の1月には、日本フェアトレード・フォーラムより全国の高校で9番目のフェアトレードスクールに認定されました。また、現在豆乳おからドーナツの開発も始めています。フェアトレードの砂糖と廃棄されるおからを使い食品ロスの削減を働きかける商品の販売を目指しています。三条鍛冶道場では、フェアトレードアイスのスプーンを作ろうと鍛冶体験をして地元の伝統文化を知ることができました。



私達からのお願いです。働いて、働いて、働かせることを児童にさせないでください。世界中の子ども達を笑顔にするために、フェアトレード商品を広げていきましょう。



【高校生部門】優良賞

Glocal 部（新潟県立燕中等教育学校）

「あったかいごはん、あったかい居場所」

私たち Glocal 部はこの5年間、地域と世界をつなぐ活動に継続して取り組んできました。ユニセフへの文房具寄付や書き損じハガキの寄付、文化祭でのフェアトレードチョコレートやコーヒーの販売、さらにスリランカの子どもたちを支援するためのスリランカカレーの販売などを行ってきました。スリランカカレーの売上金がスリランカの幼稚園建設につながると知ったとき、私たちの小さな行動が海を越えて子どもたちの未来を支えていることを実感し、大きなやりがいを感じました。



しかし、SDGs の達成期限が迫る中で、私たちは海外だけでなく日本国内にも目を向ける必要があると考えました。調べていく中で、日本では子どもの6人に1人が「相対的貧困」の状態にあることを知りました。相対的貧困とは、最低限の生活はできていても、周囲と比べて経済的に厳しい状況にあり、教育や体験の機会が制限されてしまう状態を指します。食事の質の低下、習い事を諦める、といった困難があることが分かりました。

そこで私たちは、実際に地域の子ども食堂に訪問して話を伺いました。子ども食堂は、安価で温かい食事を提供するだけでなく、子どもや保護者、地域の人々が安心して集まることができる居場所としての役割も担っています。一方で、人手不足という課題を抱えており、時には1人で準備から片付けまで行うこともあると知りました。また、「子どもだけが行く場所」、「特別な事情がある人が行く場所」という誤解があり、本当に支援を必要とする人が利用にためらいを感じてしまう現状もありました。

さらに海外のコミュニティキッチンや学校給食制度についても調査し、物価上昇の中で需要が高まっていること、寄付やボランティアの力が不可欠であることを学びました。これらを踏まえ、私たちは子ども食堂をより多くの人に知ってもらうためのポスターを作成し、学校内に掲示しました。また、子ども食堂を運営している「つばめベース」で会場設営や調理などのボランティア活動にも参加しました。



子どもたちが笑顔で食事をする姿や、親子の会話が自然と生まれる様子を目の当たりにし、子ども食堂は「食」を通して人と人をつなぐ温かな居場所であると実感しました。

私たちは、小さな一歩でも、続けることで大きな力になると信じています。地域と世界の課題を自分ごととして捉え、未来を支える行動を一步一步行っていく、また広がっていきたいと思います。

【高校生部門】優良賞

北越高校 English Club（北越高等学校）

『『空気を読む』これって、日本だけ？』

私たちは、「空気を読む」について、本当に日本だけのものなのか、またそれとどう向き合うべきなのかを考えました。何気ない会話で「空気読んでよ」と言われる人がいた一方で、海外では気にならなかったと言う生徒もいました。それをきっかけに、「空気を読む」という行為が当たり前になっている日本社会への疑問が生まれ、メインテーマとすることにしました。



まず、学校内でアンケート調査を行いました。その結果、9割以上の生徒が日常的に「空気を読まなければならない」と感じていることが分かりました。また、半数以上が「空気を読めずに失敗した経験がある」と回答し、多くの生徒が気を遣いながら生活している実態が明らかになりました。一方で、「問題なく空気を読んでいる」と答えた生徒が75%以上もいて、日本の若者も、この文化をある程度受け入れているようでした。さらに、「空気を読むことはスキルか、それとも障壁か」という二択に対しては、肯定的に捉える意見が多かったです。

そこで、異なる文化を持つ人々の視点を知るため、新潟の大学に在籍する留学生と交流して、「空気を読む」文化について議論しました。アメリカ、中国、マレーシアなど様々な国の留学生から話を聞いたところ、アメリカでは自分の意見をはっきり言う文化が強い一方、中国でも周囲を気にして発言を控える場面があるとのことでした。「空気を読む」感覚は、形は違うものの存在することが分かりました。また、書籍から「ハイコンテクスト社会」と「ローコンテクスト社会」という概念を知り、日本は前者に当てはまることを学びました。

日本と対極にあるアメリカ文化についてさらに知りたいと思い、インタビューを行いました。ALTの先生によると「日本では空気を読むことが重要だと言われながらも明確に教えられない点に戸惑いがある」とのことでした。加えて、インターンとして日本に来ているアメリカ人大学生からは、日本ではわずかな手がかりから相手の意図を察する必要がある大変だが、失敗しても気にしすぎない姿勢は大切だという助言がありました。



これらの調査を通して、「空気を読む」文化は様々な形で存在することが分かりました。大切なことは、時と場合に応じて使い分け自分が疲れすぎないようにすること、そして異文化を知る経験を積むことだと気づきました。さらに、「空気を読む」か「読まない」かを自分自身で選んでよいのだということにも気づくことができました。

【高校生部門】審査員奨励賞

水なすマカロン（上越高等学校）

「1杯のバケツに2時間、命の距離8キロメートル」

今年の夏、上越市では記録的少雨と浄水場の給水管破断により、深刻な水不足となりました。最大の水がめ、正善寺ダムの貯水率は13.8%まで低下。対象地域に住む市民11万人に40%の節水要請が出されました。

私たち水なすマカロンは、日本で当たり前に使っている水が、いかに尊いものであり、世界では当たり前でないという事実を知り、そのことを他のクラスメイトや上越高校の生徒に伝えたいと考えました。

まず、日本人が日常使っている水の量について調べました。すると、1日平均約250Lであることがわかりました。ここから40%の節水をする、約150Lになります。では、150Lでどのくらいのことができるかという、シャワーと洗濯1回で150Lを超えてしまいます。40%の節水は、私たちの日常生活が大きく制約されることがわかります。

一方世界に目を向けると、さらに厳しい環境で生活を余儀なくされている人たちがいました。エチオピアでは、国の平均の水使用量が一人当たり1日75Lとされていますが、5Lに満たない地域があるようです。

ユニセフの作成した、「アイシャの1日」という動画があります。エチオピアに住む13歳の少女アイシャが、往復8kmの道のりを何度も行き来し、毎日8時間もの時間を水汲みに費やしているというものです。学校には行けません。それでいて、一人が使える水の量は濁った水5L程度だそうです。エチオピアでは、近年続く干ばつや地球温暖化の影響で井戸が枯れ、家畜や作物が失われるなど、水不足が命に関わる深刻な問題になっています。

アフリカ地域全体では、330万人以上の子どもが水汲みに従事しているとも言われています。清潔な水がいつでも使える日本とは、非常に大きな差があります。

さて、世界の水不足の問題に対して私たちは何ができるのでしょうか。個人が節水することは大切です

が、それでは世界は救えません。重要なことは、多くの人に世界の水不足の現状を伝え、関心と支援の輪を広げることではないでしょうか。その第一歩としてクラスでプレゼンを実施したところ、「水のありがたみを知った」「関心を持つきっかけになった」などの感想が寄せられました。水の大切さを理解し、多くの人々の行動につなげるからこそ、世界の水問題を改善する力になると考えます。



ちゃでんしす（新潟明訓高等学校） 「#Free」

現代において、フェイクニュースは社会に大きな影響を与えています。生成 AI やディープフェイクといった技術の発展、そして SNS の普及による情報流通構造の変化によって、フェイクニュースはより巧妙になり、情報が拡散される速度も速まっています。

実際に、私たちの身近なところでもフェイクニュースの事例が見られます。国内では、宮城県でクマが出没したというフェイク画像を用いたニュースが拡散されました。さらに海外に目を向けると、5G 電波がコロナウイルス拡大の原因であるというフェイクニュースを信じた人々によって、基地局が破壊される事件も起きています。また、イギリスでは地震によって橋が崩壊したという誤った情報が広まり、社会的な混乱が生じました。このように、フェイクニュースは社会を混乱させるだけでなく、人命を危険にさらす恐れもあります。

この状況を危惧し、私たちはまず、フェイクニュースの拡散や発信を防ぐために何ができるのかを考えました。しかし、発信元に対して働きかけを行う際には問題があります。SNS は国籍や居住地を問わず利用される公共圏であり、多くのプラットフォーム企業が海外に拠点を置いているため、一国だけで介入することが難しいという点です。

こうした現状を踏まえ、私たちは灘会議や模擬国連に参加してきました。しかし、国際的にフェイクニュースを規制しようとしても、情報への規制に対する考え方は国によって異なります。文化の保護や政権の安定を目的に強い規制を求める国もあれば、自由主義を重視し、規制に慎重な国もありました。その結果、最終的な決議案はフェイクニュースの危険性についての共通認識を確認するにとどまり、実行的な決定には至りませんでした。

そこで私たちは、フェイクニュースの発信元ではなく、情報を受信する側である私たち自身の姿勢を変えることに注目しました。フェイクニュースを信じ、拡散してしまう人の多くは、悪意を持っている

わけではありません。その背景には、情報リテラシーの欠如があります。そこで私たちは、フェイクニュースを含めた情報との向き合い方をまとめ、在校生や保護者に向けて提示しました。「慌てず、見極め、拡散せず」を合言葉に、情報を見たときにすぐ事実だと判断しないこと、冷静に分析しファクトチェックを行うこと、そして誤った情報を広めないことを心がけてほしいと考えています。



Beyond（新潟県立直江津中等教育学校） 「超える」

私たちはこのプレゼンを通して、言語の壁を超えて世界と繋がる楽しさを伝えたいと考えています。世界と繋がる楽しさとは、世界中の人々と関わり、新しいことを知り、自分の視野を広げることです。言語の壁は高く感じられがちですが、実際には自分の気持ちや行動次第で乗り越えることができます。

その一歩を踏み出した体験として、2つの経験を紹介します。

1つ目は、夏休みに韓国・ポハン市でホームステイをしたことです。異文化や言葉が通じないことへの不安はありましたが、英語や翻訳機、ジェスチャーを使ってホストファミリーや現地の高校生と交流することができました。好きなアニメやドラマの話題で盛り上がるなど、言葉が完璧に通じなくても共通の興味や笑顔が人との距離を縮めてくれることを実感しました。

2つ目は、学校行事で参加したオーストラリアでの海外研修です。最初は英語に自信がなく、距離を感じていましたが、折り紙やカードゲームを通して交流することで、少しずつ関係を深めることができました。特に折り紙は、言葉を超えたコミュニケーションの手段となり、相手と心を通わせるきっかけになりました。



また、国際ビジネスコミュニケーション協会が2020年に実施した、全国の20代～50代のビジネスパーソン男女500人を対象とした「英語のスピーキングに関する実態と意識」調査からも、英語が苦手な理由には自信のなさが多く、英語が好きな人は外国人との交流に楽しさを感じていることが分かります。大切なのは語学力だけでなく、勇気を出して関わろうとする気持ちです。私たちは、言語の壁を越えて世界と繋がるために必要な言葉は「勇気・笑顔・気持ち」だと考えています。

チャクラ（上越高等学校）

「Being me leads to living in harmony with different cultures.」

「共生」とは一般的に「一緒に生きる」、「協力して生活する」という意味です。また、生物学的には「異種同士が足りない部分を補い合うこと」という意味で使われます。では、私たちの社会で異なる存在を仲間として認めるのは、簡単でしょうか？それとも難しいでしょうか？難しいとしたら、何故でしょうか？

現在、私たちは国籍・言語・考え方が違う人たちと共生する時代を生きています。しかし、私たちの中には、以下のような経験をした人もいます。

1人目はフィリピン出身。小学校の時に日本に移住し、見た目や肌の色で差別される経験をしました。みんなと同じように扱われたかったのに、なぜ差別されなければならないのか、ずっと疑問でした。2人目はパキスタンにルーツを持つメンバー。文化紹介の行事で、民族衣装を着て外出したところ、冷やかな視線や悪口があり、自分の着る民族衣装を恥ずかしく感じました。その経験から、自分の文化を表現しづらくなりました。3人目はタイ出身の留学生。2人の話を聞いて感じることは、素朴な疑問。「なんで文化的な民族衣装が“浮く”の？」、「なぜ新しい姿を受け知れない？」「同じような島国なのに、なんでこんなに共生の考えが違う？」

私たちの疑問は、なぜ日本で共生が難しいのかということです。そこで色々調べ、意見を出し合いました。日本は単一言語の国で、言語の壁が大きいから？植民地の経験がなく、歴史的にも異文化に触れる機会が少なかった？そう考えるとフィリピンやパキスタンでは、歴史的にも多文化・多言語が当たり前で、異文化と関わるのが日常的になっていることも明らかになりました。また、「共生」が難しい理由には、偏見や異文化への理解不足、違うものへの不安があるように感じました。

では「共生」に向けて、最初の一步をどう踏み出せば良いのでしょうか？私たちが考える一步、それは「相手を知ろうとすること」です。その一步は特別なことではなく、日常の中にあふれています。たとえば、外国にルーツを持つ初対面の人に、“恐れ”ではなく“興味”で向き合ってみたらどうでしょう？

きっとその一步が偏見をなくすことに繋がるはずです。

私たちの考える「共生」とは、ただ「一緒に生きること」ではなく、「違いを認め、違うままで一緒に生きていくこと」です。

「Being me leads to living in harmony with different cultures.」

私たちが自分らしく生きること、それが多文化共生に繋がっていくと信じています。



Ⅱ. 台湾スタディツアー

1. 台湾 スタディツアー 概要

◆日 程

令和8年3月23日（月）～令和8年3月27日（金）

◆参加者：計12名 ※学年は令和8年3月現在

【中学生部門 最優秀チーム】

新潟市立白南中学校「白南革命」

大野 友結（3年）、落合 一花（3年）

真保 耀（3年）、高橋 清志朗（3年）

山崎 寛己（教諭）

【高校生部門 最優秀チーム】

新潟明訓高等学校「Eco Chic」

川上 ゆう香（2年）、酒井 多実（2年）

田村 優奈（2年）、堀口 未央那（2年）

牧井 智生（教諭）

【事務局】（公財）新潟県国際交流協会

廣瀬 勝利（事務局次長兼企画管理課長）、菅原 瑛里紗（主事）



◆行程表

日時	場所	交通	時間	スケジュール（宿泊地）
【1日目】 3月23日 （月）	新潟空港 桃園空港 桃園	飛行機 専用車	夕方 夜	新潟空港集合（チェックイン次第、出発式へ） タイガーエアにて桃園空港へ 到着後、現地係員と合流 ホテルへ移動 ＜桃園 泊＞
【2日目】 3月24日 （火）	桃園駅 嘉義駅 嘉義	新幹線 専用車	午前 午後	台湾新幹線にて嘉義へ ◆烏山頭ダム（通称八田ダム）視察 ◆嘉義県立永慶高級中学訪問 （学生との交流会、交流夕食会） ＜嘉義 泊＞
【3日目】 3月25日 （水）	嘉義 嘉義駅 台北駅 台北	専用車 新幹線 専用車	午前 午後	嘉義市内視察 台湾新幹線にて台北へ移動 台北市内視察（故宮博物院、行天宮等） ＜台北 泊＞
【4日目】 3月26日 （木）	台北郊外	専用車	終日	台北郊外視察 ＜台北 泊＞
【5日目】 3月27日 （金）	台北 桃園空港 新潟空港	専用車 飛行機	朝 昼 夜	台北市内視察 桃園空港チェックイン タイガーエアにて新潟空港へ 新潟空港到着後、解散

◆主な研修地

烏山頭ダム

台南市官田、大内、六甲及び東山の間に位置するシラヤ国家風景地区の一つ。1920年から1930年まで10年の歳月を経て竣工された、嘉南平野の農業灌漑を主目的としたダム。上空からは珊瑚のように見えることから、「珊瑚潭」と呼ばれることもある。建設を監督した日本人技師八田與一氏の名に因み、「八田ダム」の名でも知られる。農地面積9万ヘクタールの嘉南平野は、このダムの建設による灌漑で台湾最大の穀倉地帯となった。八田與一氏は56歳で亡くなるまで台湾に大きな貢献を果たし、日台友好の象徴となっている。



嘉義県立永慶高級中学

台湾南部の嘉義県にある2009年に創立された中高一貫校で、IT教育や、国際的視野を拓くために英語教育に力を入れている。オンライン交流、日本への教育旅行などの国際交流イベントも頻繁に行っている。

故宮博物院

ルーヴル美術館、メトロポリタン美術館、エルミタージュ美術館と並び称される、世界一の中国美術工芸品の宝庫。代表的な所蔵品として「翠玉白菜」や「肉形石」などが有名。



野柳地質公園

台湾北海岸に1,700メートルにわたって細長く突出した岬。公園では、一千万年に及ぶ旺盛な地殻運動、海蝕・風蝕の影響を受けて様々な形となった奇岩の数々を見ることができ、北部台湾を代表する景勝地。女王頭（クイーンズヘッド）、キャンドル岩、仙女のサンダル岩などのユニークな奇岩群が立ち並ぶ。これらの形態は完成形ではなく、現在も変化を続ける形成の過程であることが感じられる。

2. 研修日程について

3月23日（月）

・新潟空港に到着後、出発式を開催。新潟県国際交流協会 中山輝也理事長の挨拶の後、参加者による自己紹介を行った。多くの参加者のご家族も同席し、旅行会社から出入国手続きに必要な書類等について説明を受けた。出発式終了後、タイガーエア台湾で新潟空港を出発した。

・台湾桃園国際空港到着。日本との時差はマイナス1時間。到着ロビーで現地ガイドと合流後、専用車で空港近隣のホテルへ向かった。



3月24日（火）



・ホテルで朝食後、専用車で桃園駅へ向かった。桃園駅から台湾高速鉄道に乗り、台湾中部に位置する嘉義駅へ。日本の新幹線技術が導入されており、日本と変わらず、快適な乗り心地だった。桃園駅から嘉義駅は約1時間で到着した。

・嘉義駅に到着し、専用車で嘉南平野東方の山地にある烏山頭ダム（通称八田ダム）へ向かった。このダムは、日本統治時代、台湾総督府から派遣された日本人土木技師 八田與一氏により建設され、当時不毛の大地だった嘉南平原を台湾最大の穀倉地に変えた。八田技師は大学卒業後台湾へ渡り、台湾の水利建設に人生を捧げた。その多大なる貢献により「嘉南大圳の父」として尊敬されている。

・八田技師記念室に到着。現地ではダムの概要を紹介する日本語版の動画を視聴し、管理事務所の毛所長より直々に八田技師の功績等について話を聞くことができた。また、烏山頭風景区内を案内してもらい、烏山頭ダムを見学するとともに八田技師の銅像を訪ね、その偉業に思いを馳せた。移動中の車窓からは八田技師が作った水路等が見え、八田技師の尽力が現在の台湾の景色や生活につながっていることを実感した。広大な敷地内には、八田技師の記念館のほか、4棟の歴史的建築物が復元されており、ダム建設当時の八田技師や工事関係者の宿舍がありのまに再現されている。

・八田ダム視察後、専用車で嘉義県立永慶高級中学へ。道中の車内では、ガイドから中国語による挨拶や自己紹介等を教わり、各自が交流にむけて話すこと等を準備していた。

・到着すると、生徒約25名と学校長を含めた先生方が盛大に出迎えてくれた。嘉義名物の鶏肉飯弁当をいただいた後は、歓迎式が行われ、その後



LED ライト付きの鏡づくり体験を行った。はんだごてを使い、永慶高級中学の生徒からレクチャーを受けながら楽しく作業を進めた。英語でのコミュニケーションとなるため、日本人の生徒ははじめ緊張した面持ちだったが、現地の生徒たちが積極的にコミュニケーションを取ってくれたことで、次第に打ち解けていった。その後は生徒同士で自由に交流し、各自が日本から持参したお菓子や現地で用意されたお菓子を食べ比べたり、記念写真を撮ったりするなど、笑顔と笑い声が溢れる和やかな時間となった。帰り際には互いの連絡先を交換し、別れを惜しむ姿が見られた。この日の最後には、一部の現地生徒や先生方との交流夕食会を行い、食事をともにしながらさらに親睦を深めた。

3月25日（水）



- ・ホテルで朝食後、専用車で移動し、嘉義市内にある「KANO（1931 海の向こうの甲子園）」ゆかりの地を訪れた。「KANO」は、日本統治時代の1931年に台湾代表として甲子園に出場し、準優勝を果たした嘉義農林学校野球部（通称：嘉農）の実話をもとにした映画であり、当時の日本と台湾の関わりに触れる機会となった。

- ・台湾高速鉄道で台北へ移動後、歴代の中華王朝が収集してきた美術品を主な展示品とする、世界的にも有名な故宮博物院を見学した。4階建ての本館の1階から3階までが展示スペースとなっており、古代の青銅器や玉器、各時代の書画、陶磁器、文房具、書物などの名品が、いくつかの展示室に分けて並べられている。ガイドの音声ガイ

ドのもと、主要なポイントを周り、歴史や文化について理解を深めることができた。

- ・その後は、道教・仏教・儒教の三教を習合した民間信仰の宗教施設である行天宮を訪れた。参拝方法等を教わり、各自で実践した。

- ・夕食前には地元のスーパーに立ち寄り、夕食として小籠包を味わった後、台北市で最大規模を誇る夜市の1つである士林夜市を訪れた。



3月26日（木）

- ・ホテルで朝食後、専用車で忠烈祠を訪れ、衛兵交代式を見学した。厳かな雰囲気の中で行われる衛兵の一糸乱れぬ行進を間近で目にし、生徒たちも興味深そうに見入っていた。



- ・その後は台北郊外へ向かい、自然の風化や海岸の波による侵食でできた奇岩群が集まる野柳風景特定区を訪れた。浸食を繰り返した岩が女王の頭の形にみえる「女王頭（クイーンズヘッド）」や「キノコ岩」等、長い年月をかけて自然が形づくった様々な奇岩を見ることができた。

- ・また、かつて金鉱で栄え、「黄金山城」とも呼ばれた九份老街を訪れ、当時の面影を残す街並みを散策した。その後、十分老街へ向かい、赤い灯籠に筆で願い事を書いて空に飛ばす「天燈上げ」を体験した。

3月27日（金）

・ホテルで朝食後、専用車で移動し、中正紀念堂を視察した。日本統治後に台湾を統治し、1975年に亡くなった蒋介石総統を記念して1980年に建てられた建築物である。

・その後は龍山寺を参拝。学業、恋愛、健康など様々なご利益を持つ神様が祀られており、参拝方法や台湾式のおみくじについて説明を受け、各自で体験した。

・専用車にて桃園空港へ移動。

・タイガーエア台湾で台湾桃園国際空港を出発し、帰国の途に就く。5日間ともに過ごしたガイドとも名残惜しい別れとなり、さまざまな思い出や経験を胸に、それぞれが帰路に就いた。



3. スタディツアー 参加者レポート

白南革命（新潟市立白南中学校）

※学年は令和8年3月現在

台湾スタディツアーを通して

3年 大野 友結



私が今回のスタディツアーで特に印象に残っていることは、永慶高級中学の生徒との交流です。学校に向かっているときは少し緊張していましたが、生徒たちが旗を振って暖かく迎え入れてくれたときに、緊張がほどけました。生徒との交流では、光る鏡を作りました。鏡を作っている間も生徒たちは、初対面の私に英語でたくさん話しかけてくれました。台湾のご飯のこと、好きなアニメのこと、好きな日本料理のことなど、想像していたよりたくさん話せて楽しかったです。校舎見学ではビーチバレーのコートや、屋根がついている

サッカーコートなど、充実した設備に感動しました。夜の交流夕食会では、他愛もないことでたくさん笑いあえました。そのときも、隣の生徒が英語で「トイレは大丈夫？」や「何が食べたい？」と聞いてくれました。私はあまり英語も話せないし、初対面の人に話しかけるのには勇気がいるので、彼女のようにになりたいと思いました。生徒たちと交流した時間は、長いようであつという間でした。彼らはみんな英語が流暢で、優しくて明るくて、本当に楽しい交流になりました。私も、初めて会った人でも勇気を出して話しかけたいと思いました。また、より様々な人と交流ができるように、英語の勉強に力を入れたいと思います。

3日目に夜市を散策していると、様々な方向から日本語が聞こえてきました。なんだろうと見てみたら、夜市の店員さんたちが私たちが通るたびに日本語を話していることがわかりました。「こんにちは～」や「おいしいよ！」など気さくに話しかけていて、なんとなく見てみたいなという気持ちになりました。夜市でバスケットボールのゲームをしたときは、私が失敗するたびに「もう1回！」といって成功するまでさせてくれました。他にも、2日目の朝ごはん会場で制服を着ながらご飯を見ていると、現地のおばあちゃんが私の制服を見て「きれい。すてき。」と声をかけてくれました。最初は驚きましたが、なんと言っているかわかると本当に嬉しかったし、気持ちがパッと明るくなりました。

このような経験を通して私が思ったことは、人と関わるうえで住んでいる地域や言語などとは関係ないということです。お互いの文化が違ってもその文化を伝え合えばいいし、言語が違えば英語で話したり、ジェスチャーを交えたりして楽しく話すことができます。私はこれから高校生になるので、自分の殻を破って様々な人と関わりが持てるように頑張ろうと思いました。

今回の台湾スタディツアーを通して、僕は多くの学びと気づきについて知ることができました。そこで特に印象に残っていることが三つあります。

一つ目は、八田與一さんが建設した烏山頭ダムを拝見したことです。当時、この地域は水不足が深刻で、農業がうまくいかないという問題がありました。しかし、八田與一はダムや水路を整備することでその問題を解決して、多くの人々の生活を支えたことを知り、とてもすごいなと思いました。僕も、人の役に立てるように頑張りたいと感じました。



二つ目は、野柳地質公園を見学したことです。そこには、長い年月をかけてできた不思議な形の岩がたくさんあり、とても驚きました。特に一番有名なクイーンズヘッドという岩を見てびっくりしました。横から見てみると、女王の横顔みたいに見える岩で、すごくおもしろいなと思いました。また、この形もずっと同じではなく、年々少しずつ削られてできたと知り、この姿を見ることができてとても貴重だと感じました。

三つ目は、台湾の高校を訪れて、現地の生徒と交流したことです。最初はすごく緊張してうまく話せるか不安でしたが、相手から笑顔で積極的に話しかけてくれたおかげで、少しずつ会話をすることができました。一緒に活動をしたり、話をしたりすることで、日本との学校生活の違いや似ているところに気づくことができ、とてもいい経験ができました。特に、好きなことや日常の話をする中で、国籍が違っても、こんなに楽しく会話が弾むんだと改めて感じました。また、言葉が完全に通じなくても、ジェスチャーや簡単な英語を使うことで、やはり積極的にコミュニケーションをとることは大切だなと感じました。

今回の経験をこれからの生活に活かし、自分から行動し、頑張っていきたいです。

異文化にふれることの大切さ

僕は、台湾スタディツアーで多くのことを知り、貴重な体験をさせていただきました。僕が特に印象に残っていることは三つあります。

一つ目は、日本の寺院と台湾の寺院が全体的に全く異なることです。台湾の寺院は、門から入ると周りが塀で囲まれ、中庭のような感じになっています。また、お願いごとをする時に、日本のようにただお願いをするのではなく、自分の名前、生年月日、住所も含めてお願いをします。僕は、日本にも昔、台湾や中国からやってきた文化を取り入れたことでできた寺院があるのに何もかも日本と違うことに驚きました。



二つ目は、嘉義にある永慶高級中学との交流です。台湾の高校生の皆さんは、英語がスラスラと話せてとても驚きました。勉強や学び方は日本と何が違うのだろうと気になりました。永慶高級中学の生徒は、積極的に話しかけてくれてすぐに仲良くなれました。楽しく活動ができて良かったです。

三つ目は、烏山頭ダムの見学です。このダムは、日本人の八田與一さんが1930年に建てたダムで、このダムのおかげで荒れた土地でも水が取れるようになりました。台湾人は、日本でもあまり知られていない日本

人の銅像を建て尊敬していて感心しました。また第二次世界大戦中、台湾が日本に植民地支配されている時、日本による金属類回収で八田さんの銅像が回収されないように隠したというお話も聞きました。僕はすごく感動しました。敵国の人の銅像をどんな状況にあっても大事にしていることはすごいなと思いました。こういうことが「多文化共生」や「平和」につながる一歩なのかなと感心しました。

僕は、この台湾スタディツアーを通して、友達になること、一緒に楽しむこと、尊敬する人などに人種や国籍は関係ないということを学ぶことができました。今、世界がどんどん戦争をする方へ向かっている中で、この異文化に触れることはとても大事なものだと思いました。僕は色々な人に台湾の文化を共有したいと思いました。異文化に触れると、新しい考え方や楽しみに出会うことができます。そして、その国や自分の国のよさに気づくことができます。僕は、このスタディツアーでの経験を生かして、どんな人にも尊敬する気持ちをもって生活していきたいです。

台湾での学び

3年 落合 一花

スタディツアー1日目、初めての海外で、もちろん楽しみにしていましたが不安なことも多く、正直飛行機では本当にドキドキでした。しかし、いざ空港を出て足を踏み入れてみると日本のコンビニやチェーン店など、日本の街なみとそっくりな景色で驚きました。そこら中にある看板の文字も漢字とよく似ていてなんとなく意味も読み取ることができ、台湾に入っすぐに緊張がとけました。私はこの台湾スタディツアーの5日間を通して、楽しい思い出と共に、台湾の文化や日本とのつながりなど本当にたくさんのことを学ばせていただきました。



その中で特に印象に残っているのは嘉義県立永慶高級中学のみなさんとの交流です。バスで学校に到着した時、生徒の皆さんがあたたかく出迎えてくださり本当に嬉しかったです。交流の際は、英語を使

って会話しました。あまり上手く伝わらないこともたくさんあったけれど、中学校3年間で習ってきた自分の英語が外国でも使えるということを知って、英語の大切さを改めて実感しました。また、現地の生徒のみなさんがとても明るく、フレンドリーで、表情やジェスチャーなど様々な方法でお互いに工夫し、コミュニケーションをとることができて楽しかったです。バスでの移動中にガイドの陳さんから教えてもらった台湾華語をつかって話した時には、日本語で「すごい！」と言ってくれて本当に嬉しかったです。お互いにそれぞれの言語や文化を教え合い貴重な経験ができてよかったです。そしてもうひとつ、台湾での食事でも深く思い出に残っています。はじめて台湾料理を食べてみて、日本とは違う台湾ならではの食事を経験することができました。日本では一人一人に小分けで料理が出てくることが多いですが、台湾のお店の料理は大皿に入っていることが多く、必ず取り箸が置いてありました。それぞれの大皿がターンテーブルにのっており、大勢での食事だったので、取り分けをする際にとても便利でした。台湾の良さ、日本の良さにそれぞれの食事文化を通して気づくことができました。

最後に、このような貴重な経験の場をつくってくださった新潟県国際交流協会の皆様、現地ガイドの陳さん本当にありがとうございました。この経験を活かしこれからも一步步成長していきたいと思えます。

「何でも見てやろう」を合言葉に

教諭 山崎 寛己



台湾スタディツアーの中で、ガイドの陳さんから頻繁に耳にした言葉がありました。それは「日本統治時代に…」という言葉です。親日家が多いことで知られる台湾。八田技師のようにダム建設の尽力が大きく評価される一方で、「抗日闘争」という言葉も恥ずかしながら初めて知りました。日本が優位に立ちながら、台湾をコントロールしようとしたわけですから、反発がある（あった）のは当然のことです。旅の道中で、ある本の内容を思い出しました。

本のタイトルは『何でも見てやろう』。米国に留学後の貧乏旅行記を綴ったこの作品で有名になった作家の小田実（おだまこと）氏は、1950年代のアメリカについて次のように書いています。当時、バスの待合室に、広く清潔な白人用と、狭く汚い黒人用がありました。日本人は白人に差別されていましたが、白人用を使うことができたそうです。その時、小田は不快さを感じながらも、どこかホッと、同時に彼はそこで白人の眼で黒人を見始めている自分に気づきます。「ひょっとしたら、私はユカイであったのかもしれない」。誰もが簡単に差別する側に立ち、途端に差別される側の痛みに鈍感になります。日本が統治していた時代には、台湾の人に対する、上記にも似た差別があったことが容易に想像されます。現在の台湾を「親日」と喜ぶ前に、実は辛く悲しい歴史も数多くあったことを知らなければならぬと感じました。

昨今、外国人を巡る話題が報道・選挙などで取り上げられています。「これ以上外国人は日本に入らな

い方がいい」という意見と「〇〇人は日本から出ていけ」という排外主義（ヘイトスピーチなど）は地続きであり、そうした空気が蔓延することに強く危機感を覚えています。その背景にあるのは、知らないことへの先入観が大きいのではないかと考えています。他の国、その文化、宗教や習慣を知らない、それらが拒絶につながっているような気がします。確かに出会ってみなければ、足を踏み入れてみなければ不安なことって多いですね。

今回、子どもたちと自分が実際に外国に足を運んでみて、そこで触れる人たちの優しさや温かさ、言語の壁を超えて築くことができた結びつき（私は2年連続訪れているのでなおさら）に強い力を感じました。子どもたちが口を揃えて、「永慶高級中学との交流が1番楽しかった!」というのは、相手を知り、つながることができた経験が何よりも尊いものだということに気づいたからです。

「何でも見てやろう」を合言葉に、1人の大人としての自分自身も、これから出会うたくさん子どもたちとも、世界とつながる体験をしてみたいと思うツアーでした。貴重な機会を与えてくださった新潟県国際交流協会に心から感謝しています。

Eco Chic（新潟明訓高等学校）

※学年は令和8年3月現在

親日意識から得た学びと成長—台湾での経験を通して—

2年 川上 ゆう香

台湾での5日間の経験を通して体感した「親日」ということについて紹介します。

台湾で過ごしている中で、現地の人々が私を日本人だと認識すると、自然に日本語で話しかけてくれる場面が多く見られました。これは観光地に限らず、コンビニなどの日常的な場所でも同様でした。例えば、「謝謝」と中国語で話しかけても、「ありがとうございました」と日本語で返されることがあり、このような経験から台湾には日本に対する親しみや好意が広く浸透していると考えました。このような環境はありがた



いものであった一方で、相手の言語である中国語を使って交流できるようになることの重要性を強く感じました。また、台湾の生徒との交流会では、私の拙い英語にもかかわらず、積極的に理解しようとし、会話を広げてくれた姿が印象的でした。私たちと同じように英語を学んでいるにもかかわらず、異国の生徒と交流するときのこのような姿勢の違いがあることを感じ、語学力だけでなく、誰かと話すことに対する積極性の重要性も実感しました。この経験から、高校生という学ぶ機会に恵まれた時期に、語学を含め様々なことを積極的に学ぶ必要があると感じました。

さらに、台湾の気候や自然環境は日本とは大きく異なり、植生や気温の違いからも異文化を強く感じることができました。街中の看板が漢字で書かれている点やあちらこちらから聞こえてくる中国語から、五感全てで台湾にいることを実感できました。また、歴史を感じさせる建造物を頻繁に見かけることが多く、それぞれが持つ背景についてガイドの陳さんから説明を受けることで、中国の歴史と建物の関係を理解することができました。これらの経験から、歴史的背景を事前に学ぶことで、訪問時の理解や体験の質がさらに高まると思いました。

台湾で感じた最大の成長は「もっと学びたい」という姿勢だと思います。以前までの私であれば日本語でラッキーぐらいに思っていたと思います。しかし、台湾でたくさん話し、この機会を与えてもらったことへの感謝から、自分からもっと知りたいと思い、学びたいと感じました。この気持ちを忘れずに文化を学び言語を学び、いつかまた台湾に行きまた違う視点で日本と台湾のつながりをたくさん見つけたいと思います。

以上のことから、台湾は日本に対して強い親しみを持つとともに、文化・言語・歴史において多くの学びを得ることができる場所でした。

この5日間をこれからの人生に活かし、自分自身の成長に繋げたいと思います。プレゼンテーションの準備からこのスタディツアーまで関わってくれた多くの方々へ、心からの感謝を申し上げます。

今回のスタディツアーは、私にとって初めての台湾への渡航でした。当初は、慣れない環境の中でこの貴重な機会を無駄にしてしまうのではないかと不安を強く抱いていました。普段から積極的に行動することに苦手意識があり、特に台湾という異国の地で自分を出して学びを得ることは、私にとって非常に高いハードルに感じられました。



最初に訪れた永慶高級中学では、現地の学生と十分に会話を交わすことができず、円滑なコミュニケーションを図ることができませんでした。そのような中、他のグループの様子に刺激を受け、躊躇しながらも隣の学生に声をかけてみると、笑顔でわかりやすい英語で応じてくれ、とても嬉しく感じました。

その後の交流会や夕食会などのプログラムを通して、拙い英語ながらも少しずつコミュニケーションが取れるようになり、夕食会の頃には和やかな雰囲気の中で話せるようになっていました。意思疎通が

図れるようになるにつれて自分の意識も変化し、最初は受け身だった会話も、継続させたいという思いから、意識的に自ら話題を提供するよう努めるようになりました。しかし、英語でうまく表現できない場面や、相手に正しく聞き取ってもらえない場面も何度かありました。それでも、すぐに諦めたり翻訳アプリに頼ったりするのではなく、自分の言葉で伝えようと試みました。その結果、相手も理解しようと真摯に耳を傾けてくれ、積極的にコミュニケーションを取ることで相互理解が深まることを実感しました。

また今回の経験では、会話の仕方だけでなく台湾の人々の価値観についても学ぶことができました。ガイドの陳さんや八田ダムの職員の方々、夜市の人々との交流を通して、台湾の方々の親日的な姿勢に非常に驚きました。というのも、訪問前の私は、日本の統治や同化政策の歴史から、日本に対して否定的な感情を持っているのではないかと考えていたからです。しかし実際に訪れてみると、その印象はすぐに覆されるほど温かく迎えていただきました。また、バスの中で陳さんが話してくださった台湾と日本の歴史の説明から、台湾の方々が日本に親しみを感じている背景を知ることができ、大変印象に残りました。

この経験から、言語の異なる相手と話す際には、完璧な表現にこだわるのではなく、伝えようとする姿勢や主体性が重要であることを学びました。また、異文化を理解しようとする過程で、自国の文化や歴史についても改めて考えるきっかけとなり、相手を知ることが自分自身の理解にもつながると実感しました。今後は、異文化の相手とのコミュニケーションにおいて積極性を大切にし、自分の考えを的確に伝える表現力を磨いていきたいです。

このスタディツアーでは、一生の財産となるであろう経験を多くさせていただきました。その中で私が成長したことは主に2つあります。

1つ目はコミュニケーション能力です。私は幼い頃から初対面の人と話すことが苦手でした。明訓高校で一年前に参加した海外研修では、現地の学生やホストファミリーに自ら話しかけることができず、悔しい思いで帰国したことを今でも覚えています。しかしこのスタディツアーで行われた学校交流では自ら話しかけるだけでなく、会話をより長く続けるために、関連する話を拙い英語でなんとか話すことができました。また、台湾の生徒や店員さんに少し日本語を話せる人が多いことに驚きました。例えば、現地の生徒が先生を呼んでくれるとき、日本語で「ちょっと待って」と言ってくれたり、九份のお土産屋ではほとんど日本語で商品の説明をしてくれたりしました。このような人たちはフレンドリーで話しやすいおかげでコミュニケーションに自信ができました。そして現地の学校で出会った友人の中では今でも連絡を取り合っている人もいます。



2つ目は異文化を受け入れる力です。台湾には日本に似た文化が多くあります。しかし、異なる文化もあります。それでも、そうした文化を否定するのではなく、視点を変えてポジティブな側面を探っていくことが、良い国際交流の一つだと思います。私は台湾で臭豆腐という食べ物に出会いました。匂いが強く、私にはそれを食べることができませんでした。しかし、それを美味しそうに食べる現地の方を見て、食文化の違いがあって面白いと感じ、その文化を尊重しようと思いました。

最後に、ツアーの予定の調整や管理をしてくださった協会の皆様やガイドの陳さん、プレゼンの指導やツアーの同行をしてくださった先生、ともにプレゼンを作り上げてくれたチームメイト、これまでの活動を見守ってくれた家族に心より感謝いたします。グローバル化と呼ばれる時代、コミュニケーション能力も異文化を受け入れる力も重要になってくると考えます。プレゼンからツアーまでの経験を通して学んだことを今後の人生に活かしていきたいです。

台湾スタディツアーで学んだこと

私は今回のスタディツアーで、大きく分けて二つのことに気付きました。

1つ目は、言語の壁を越えたコミュニケーションの大切さです。3月24日に嘉義県立永慶高級中学を訪問し、現地の学生と交流しました。はんだづけの体験では、うまくできなかった私に対し、現地の学生が何度も丁寧に教えてくれました。英語でうまく伝えられない場面でも、ジェスチャーや表情を交え



て寄り添ってくれたことで、分からないことを素直に「分からない」と言える雰囲気が生まれました。その瞬間、言語が違っていても人は理解し合えるのだと実感しました。この経験から、異文化コミュニケーションでは、完璧でなくても自分の言葉で伝えようとする「伝える勇気」が大切だと気が付きました。また、今度は自分が受け入れる側として、相手が安心して話せる環境をつくることの重要性にも気が付きました。

2つ目は、台湾と新潟のつながりです。九份ではかつて金の採掘が行われていたという話を聞き、実際に訪れると金山で有名な佐渡との共通点に気が付きました。また、九份の街並みは『千と千尋の神隠し』を思わせ、日本の伝統的な風景との共通性を感じました。さらに、台湾の都市にも日本と重なる部分が多く、異国でありながらどこか懐かしさと親しみを覚えました。こうした気付きから、異文化の中に一步踏み出すことは、思っているほど高いハードルではないと感じました。

最終日に廣瀬次長に伺った「もし道に迷い、来た道を戻れないのなら、頂上を目指せばよい」という言葉は、今も強く心に残っています。今回のコンテストで得た自信とツアーでの学びは、今後の人生で困難に直面し、道に迷ったときに、自分の目指すべき「頂上」を示してくれる道標になると確信しています。

最後に、本ツアーを支えてくださった皆様に心より感謝申し上げます。

台湾スタディツアーに同行して

新潟明訓高等学校 教諭 牧井 智生

まずは、台湾スタディツアーに向けてご尽力いただいた皆様に心よりお礼申し上げます。特に、本校生徒と時間を共有してくださった廣瀬様、菅原様、山崎先生、白南中学校の皆さんのおかげで、とても充実した5日間となりました。

さて、私にとって2年ぶり、2回目のスタディツアーへの参加となりました。2年前と変わらず、永慶高級中学への訪問は最も有意義な時間となりました。郭校長先生を中心に、先生方や生徒の皆さんの温かいおもてなしのおかげで、緊張していた生徒たちもすぐに打ち解けることができました。新潟から持参したお菓子と、現地で用意されていたお菓子の食べ比べをしたり、SNSを交換したりと、談笑する姿がとても印象的でした。2年前に引率した卒業生と先日会ったところ、今でも台湾の友達とつながっているとのこと。今年の生徒たちもここでのつながりが一生のも



のなることを願っています。

永慶高級中学とは、2年前の訪問以降、本校・新潟明訓高校とオンラインでの交流を続けています。今回は滞在時間も長く、教員である私も永慶高級中学の先生方と今後の交流について話を進めることができ、さらなる交流に繋げることができそうです。

スタディツアーでの訪問先では、ガイドの陳さんに歴史背景について教えていただき、知識を深めるだけでなく、廣瀬様から「日本との共有点」や「日本との関わり」についてもお話を伺いました。台湾の発展に大きく寄与した烏山頭ダムや、日本統治時代に甲子園に出場した嘉義農業、佐渡金山に似た十三層遺跡など、現地を訪れたことは生徒たちの記憶に鮮明に残ることでしょう。また、MRTの乗り方も教えてもらい、将来台湾を訪問する際のハードルも下がったと信じています。

今回のスタディツアー出発式において、新潟県国際交流協会理事長の中山様より、「国際交流は選ばれた人ができるものだ」とのお話がありました。国際理解教育プレゼンテーションコンテストに参加する生徒たちのように、世界で起こっている出来事を自分事として捉え、発信できる若者がまさにその該当者だと思います。昨年度に第20回を迎えたこのコンテストが、今後も発展し、多くの中高生の学びの場となることを心より祈念いたします。

Ⅲ. 付録資料

新潟から世界へ翔ける！ ～あなたが知ったこと、行動することを伝えよう！～
令和7年度 国際理解教育プレゼンテーションコンテスト 実施要項

1 開催要領

(1) 趣 旨

国際化が加速する現在、多様な文化や価値観を持つ人々が互いに認め合い、支え合って生活する多文化共生社会の構築とともに、国際平和のために主体的に物事を考え、積極的にコミュニケーションを取ることができるグローバル人材の育成が重視されています。

よりよい国際社会の実現に向け、高い国際意識とコミュニケーション能力を身につけた若者の育成や、県民の国際理解の推進を図るため、県内の中学生・高校生自らが国際理解に関して自由な発想で率直に発表を行うプレゼンテーションコンテストを開催します。

(2) 主 催 公益財団法人新潟県国際交流協会、新潟県国際理解教育推進協議会※注

(3) 開催日時 令和7年 12 月 21 日(日) 12:00～17:00(予定)

※開催時間は変更になる場合があります。

(4) 会 場 朱鷺メッセ 国際会議室(マリンホール)(新潟市中央区万代島 6-1)

(5) 実施部門 中学生部門 高校生部門

(6) 表 彰 部門ごとに、次の賞及び副賞を贈呈します。

- ・ 最 優 秀 賞 1チーム:海外スタディツアー
- ・ 優 秀 賞 2チーム:賞状・図書カード(3万円分)
- ・ 審査員奨励賞 1チーム:賞状・図書カード(2万円分)

(7) 観 覧 詳細は開催1か月前までにホームページ等で発表する予定です。

2 応募要領

(1) 応募条件

学校・地域組織など(以下「団体」という)による応募、個人による応募のいずれの方法でも受け付けますが、1団体からの応募は各部門1チームを基本とします。また、応募には、次の全てを満たすチームであることが必要です。

- ・新潟県内の中学校・高等学校(中等教育学校、高等専門学校、特別支援学校を含む)に在籍する生徒3名以上5名以内で構成するチームであること。
- ・チームには上記以外に満20歳以上の指導者(教員等)が1名以上付いていること。
- ・最優秀賞の副賞が海外派遣であることから、当コンテストへの応募について保護者の了解を得ること。

(2) 発表内容

- ・国際理解に関連すること※であればテーマと内容は自由であるが、生徒自らの問題意識に基づいて主体的に考えた発表内容であること。
- ・生徒自らが十分な調査・研究を行い、課題解決へ向けた考えを論理的に発表すること。
- ・学校での学習、クラブ活動、地域での活動などの成果について発表すること。
- ・発表の形態は自由であり、聴衆にメッセージを率直に伝えること。
- ・発表は生徒のみで行うものとし、指導者は登壇やパソコン操作などの関与を行わないこと。

※近年の発表テーマの例

食品ロス、海洋汚染、技能実習生との交流、国際平和、LGBTQ、ジェンダー問題、伝統文化の継承・発信、他者理解、ファストファッション、フェアトレード、児童労働、難民問題への関わり方、自然災害、海外研修からの学び、多様な人々とのコミュニケーション、校則の国際比較 等

(3) 発表に際しての留意事項

- ① 発表時間は8分以内とする。
- ② 発表に使用する動画、インタビュー等の音声データの使用時間は各1分以内とする。
ただし、BGMとして使用する場合はこの限りではない。
- ③ 写真・イラスト、動画、音声等の使用に際しては、著作権、肖像権など他人の権利を侵害しないこと。
- ④ 原則として、発表に使用する機材は事務局で用意するパソコン(Windows または Mac)を使用するものとする。プレゼンソフトを利用する出場者は、Microsoft PowerPoint または Apple Keynote で作成したファイルを事務局まで事前に提出する。提出方法は出場決定者に連絡する(出場者の PC のセキュリティ保護やウイルス対策の観点から、各自の PC の持込はご遠慮ください)。
- ⑤ 日本語以外の言語での発表も可能であるが、訳文や資料などの配布は認めない。発表者自身がメッセージを伝える工夫をすること。

※①および②の制限時間を超過した場合は、審査で減点されます。

応募に際し、必ず「国際理解教育プレゼンテーションコンテスト」特設サイト「よくある質問」をご確認ください。
(https://www.niigata-ia.or.jp/jp/ct/000_precon/faq.html)

(4) 審 査 国際理解教育・国際協力活動の専門家等の審査員が審査します。

ア「最優秀賞」及び「優秀賞」は下記の観点から審査します。

- ① テーマ／コンテンツ(主題／内容)
 - ・ 生徒自らの問題意識や、主体性があるか。
 - ・ 国際理解を深める明確な意図があるか。
 - ・ 内容が論理的で、聴衆を説得する力があるか。
 - ・ メッセージや行動が具体的で、実行可能性があるか。
- ② プレゼンス／オリジナリティ(発表／独創性)
 - ・ 発表者の意見を、自らのことばで率直に表現しているか。
 - ・ 発表に自信や熱意があり、聴衆へメッセージが伝わっているか。
 - ・ 調査・研究の手法、資料の作成や発表の方法などにオリジナリティがあるか。
- ③ リソース(資料)
 - ・ 十分な量と質の資料が収集されているか。
 - ・ 資料の検討が多角的になされているか。
 - ・ テーマに関連した資料として活用されているか。
- ④ チームワーク
 - ・ チームワークよく発表が行われているか。
 - ・ チームとしての取組みの成果が顕著であるか。
 - ・ 事前の練習の成果が表れているか。
- ⑤ 総合点
 - ・ 全体を通じて強く印象に残る内容の発表が行われたか。
 - ・ 生徒が将来にわたって国際理解を深めていく意欲が感じられたか。

イ「審査員奨励賞」は、審査項目の得点や順位にかかわらず、今後の展開への期待が高く、特に印象に残った次の①または②のチームの中から選定されます。

- ① 初出場チーム
 - ・ 過去5年間、本コンテストに出場していない団体からのチーム
 - ・ 個人による出場の場合、いずれの生徒も前年度本コンテストに出場していないチーム
- ② 低学年チーム
 - ・ 中学生部門は、1、2年生で構成されたチーム
 - ・ 高校生部門は、1年生のみで構成されたチーム

(5) 応募方法

所定の応募用紙に必要事項を記入し、令和7年9月30日(火)必着で、下記宛に郵送、FAX、Eメールのいずれかで送付してください(応募用紙は新潟県国際交流協会ホームページ、特設サイトからもダウンロードできます)。

(6) 出場チームの決定

- ・出場チーム数は、中学生・高校生各部門合わせて16チーム程度とします。
- ・応募多数の場合、各部門2チーム以上を応募している団体から出場チーム数を調整する可能性があります。その場合、各部門2チーム以上を応募している団体に推薦順位をつけていただきます。(10月中を予定しています。)
- ・各部門の応募が5チームに満たない場合は、その部門は開催しません。

(7) 応募先・問合せ等

(公財)新潟県国際交流協会 国際理解教育プレゼンテーションコンテスト参加者募集係

住所:〒950-0078 新潟市中央区万代島5-1 万代島ビル2階

電話:025-290-5650 FAX:025-249-8122 E-mail:nia21c@niigata-ia.or.jp

ホームページ:<https://www.niigata-ia.or.jp/>

特設サイト:https://www.niigata-ia.or.jp/jp/ct/000_precon/

3 その他

(1) 交通費支援について

コンテスト会場までの交通費は、基本的に、各自ご負担いただきます。

ただし、遠隔地からの参加チームには、生徒5名、指導者1名まで、交通費の一部を支援します。

○支援額の算定方法

下記により算定します。

対象	所在地
団体・個人の生徒	学校の所在地
団体の指導者	団体の所在地
個人の指導者	指導者の住所地

○支援額(往復)

地域	金額
新発田市、聖籠町、阿賀野市、五泉市、三条市、田上町、加茂市、燕市、弥彦村、新潟市西蒲区、新潟市南区	500 円/人
阿賀町、見附市、出雲崎町、長岡市、村上市、関川村、胎内市	1,000 円/人
小千谷市、魚沼市、柏崎市、刈羽村	1,500 円/人
南魚沼市、十日町市、上越市	2,000 円/人
津南町、湯沢町、妙高市	2,500 円/人
糸魚川市、佐渡市	3,000 円/人
粟島浦村	4,000 円/人

(2) 作品の取扱い

- ア コンテストの写真、ビデオ、発表資料、海外スタディツアーの写真、レポートは、当協会の広報等に利用させていただきます。
- イ 報告書に掲載するため、コンテスト終了後、各チームの発表概要を提出していただきます。報告書は当協会のホームページ等で公開する予定です。

(3) 個人情報保護について

- ア 申込書にご記入いただいた個人情報は、法令及び当協会の個人情報保護規程に従って厳重に管理し、当コンテストの運営以外の目的で使用することはありません。
- イ 出場チームについて、名前・学校名・学年などが当協会の広報媒体や報道機関等が発行する媒体に公開されることがあります。

(4) 海外スタディツアー派遣について

- ア 時 期:令和8年3月(春休み期間中5日間程度)
- イ 行き先:台湾(予定)
- ウ その他:以下の点をご承知おください。
 - ・感染症の拡大、不慮の災害等により、やむをえず派遣を変更・中止する場合があります。
 - ・スタディツアーの派遣経費は、1チームにつき生徒5名及び指導者1名分まで当協会が負担します。
 - ・ツアーに参加する指導者は、ツアー中の生徒の安全配慮や健康管理等にご協力をお願いいたします。
 - ・自宅と集合・解散場所(新潟空港の予定)間の交通費、旅券取得費用、旅行保険料(任意)は派遣者にご負担いただきます。
 - ・集合場所から当協会職員が随行するほか、現地ガイドが同行します。
 - ・派遣者全員から、帰国後にレポートをご提出いただきます。

※注 新潟県国際理解教育推進協議会構成団体

新潟県知事政策局国際課、新潟県教育委員会義務教育課、新潟県教育委員会高等学校教育課、新潟県立教育センター、新潟市教育委員会学校支援課、独立行政法人国際協力機構(JICA)東京センター、新潟大学、上越教育大学、新潟国際情報大学、新潟県立大学、敬和学園大学、新潟県立看護大学、特定非営利活動法人にいがたNGOネットワーク、公益財団法人AFS日本協会新潟支部、新潟県青年海外協力協会、公益財団法人新潟市国際交流協会、公益財団法人長岡市国際交流協会、公益社団法人上越国際交流協会、公益財団法人新潟県国際交流協会

令和 7 年度国際理解教育プレゼンテーションコンテスト報告書

2026 年 9 月発行

編集・発行 公益財団法人新潟県国際交流協会

〒950-0078

新潟市中央区万代島 5 番 1 号 万代島ビル 2 階

TEL : 025-290-5650 FAX : 025-249-8122

E-mail : nia21c@niigata-ia.or.jp

URL : <https://www.niigata-ia.or.jp>